

Paramahaṃsapriyā 研究ノート

眞鍋 智裕

1. はじめに

筆者は現在、インドの哲学学派であるアドヴァイタ学派（Advaita, 不二一元論学派）の学者マドゥスーダナ・サラスヴァティー（Madhusūdana Sarasvatī, ca. 16th, 以下マドゥスーダナと表記）が聖典 *Bhāgavatapurāna* (BhP) の冒頭第一偈に対して著した註釈 *Paramahaṃsapriyā* (PP, alias *Bhāgavatapurāṇaprathamaślokaśāstrīyā*) に見られる、マドゥスーダナの主宰神 (īśvara) 観を解明することを目的に、PP の解読を行っている。既に全体の試訳は完成しており、今後はより精確に文意を理解するため、マドゥスーダナの他の著作や彼以前のアドヴァイタ学派の諸文献の関係する箇所を対照させつつ翻訳の精度をあげていく予定である。また更に、その成果をもとに学術大会での発表を行い、また研究論文を発表していく予定である。本研究ノートは、PP の構成、PP の特徴、また PP を試訳し終えて浮かんだ問題点等をまとめたものである。既述の通り、まだ精確に PP を読み込んだわけではなく、本研究ノートの記述は雑駁で粗雑なものではあるが、PP に対する先行研究や先行の現代語訳がない状況であるので、PP の大まかな内容や成立背景を得るために利用していただけると幸いである。

2. *Paramahaṃsapriyā* 研究の意義

本節では、マドゥスーダナが属するヴェーダーンタ学派（アドヴァイタ学派）の紹介も兼ねて、PP の成立に関する思想史的背景と PP 研究の意義を述べたい¹。

古代から現代にいたるまで、インドの宗教思想界に莫大な影響を及ぼしているものに「ウパニシャッド」(*Upaniṣad*) 文献群がある。元来ウパニシャッドは祭式を重視するバラモン達の奉じている聖典「ヴェーダ」(*Veda*)の末尾を飾るものであるため、その内容は呪術や神話等、雑多なものが含まれている。しかし、古来ウパニシャッドは、宇宙の根本原理ブラフマン (*brahman*) と個人の根本原理アートマン (*ātman*) が同一であること、即ち「梵我一如」を説いた聖典として尊ばれて来ていることも確かである。そして、「梵我一如」の観点から、種々雑多な内容が説かれているウパニシャッドに統一的解釈を施そうとした学派として、ヴェーダーンタ学派が存在する。

ヴェーダーンタ学派が独立した学派として成立した時期に関しては、ヴェーダーンタ学派の中の一派であるアドヴァイタ学派の開祖シャンカラ (*Śaṅkara*, ca. -756-772-) 以前の文献がほとんど遺されていないため、正確なことは分からない。しかし、ヴェーダーンタ学派の根本経典 *Brahmasūtra* (BS) が成立したのが紀元後 450 年頃とされているため、おそらくこの頃、独立した学派としてヴェーダーンタ学派が成立したと考えてよいだろう。しかしヴェーダーンタ学派は、それ以後しばらくインド思想界の表舞台に現れることがほとんどなく、仏教文献に対論者として現れたり、文法学者バルトリハリ (*Bhartṛhari*, ca. 5th) がヴェーダーンタ思想に基づいて言語哲学思想を打ち立てたりしているほか、ほとんど文献に現れない²。ようやく 7 世紀に入り、ガウダパーダ (*Gaudapāda*, ca. 640-690) が登場し、仏教的ヴェーダーンタ思想を説いた。先に述べたシャンカラは、このガウダパーダの孫弟子にあたる。

続いてシャンカラによって、仏教化されたヴェーダーンタ思想から仏教臭を出来る限り排除する努力がなされ、後世アドヴァイタ学派と称されることになる学派がヴェーダーンタ学派内に成立した。このアドヴァイタ学派は、ブラフマン (= 最高のアートマン) 以外の全てのものは虚偽であり、真に実在するのは純粹に精神的実在物であるブラフマンのみであると、厳格な精神一元論を唱えた。この学派においては、ブラフマンの不二性を説くウパニシャッドの文句 (*advaitaśruti*) を学習し (聴聞, *śravaṇa*)、思慮し (思惟, *manana*)、そしてそれを繰り返し瞑想すること (瞑想, *nididhyāsana*) によってブラフマンの明知 (*brahmavidyā*) を

獲得し、ブラフマンに没入することが輪廻世界からの解脱と考えられている。またシャンカラは、諸ウパニシャッド、聖典 *Bhagavadgītā* (BhG), BS それぞれに対して註釈を著し (諸 *Upaniṣadbhāṣya*, *Bagavadgītābhāṣya* (BhGBh), *Brahmasūtrabhāṣya* (BSBh)), また独立の著作 *Upadeśasāhasrī* (Upad) 等を著している。諸ウパニシャッド、BhG, BS に対する註釈は、このシャンカラのものが現存最古のものであり、その影響力の大きさがうかがえる。またヴェーダーンタ学派において、諸ウパニシャッド、BhG, BS は「三種の道」(prasthānatraya) と呼ばれ、ヴェーダーンタ学派の学者達は、これらの研究を軸にその思想活動を展開している。

シャンカラ以後も多くのヴェーダーンタ学派の学匠が現れ、ヴェーダーンタ学派にはアドヴァイタ学派を含めて五つの伝統学派がある。それは、ラーマヌジャ (Rāmānuja, ca. 1017-1137) の被制限不二論 (Viśiṣṭādvaita), マドゥヴァ (Madhva, ca. 1238-1317) の二元論 (Dvaitavāda), ニンバールカ (Nimbārka, ca. 14th) の本質的不一不異論 (Svābhāvīkabhedaḥvedavāda), ヴァッラバ (Vallabha, ca. 1473-1531) の清浄不二論 (Viśuddhādvaita) である。この五伝統学派には含まれないが、チャイタニヤ (Caitanya, ca. 1485-1534) 系の不可思議不一不異論 (Acintyābhedaḥvedavāda) も挙げられよう³。そして、ラーマヌジャからチャイタニヤに至るまで全て、宗教的にはヴィシュヌ神 (Viṣṇu) を絶対的な最高神 (parameśvara, 主宰神) として奉ずるヴィシュヌ教 (Vaiṣṇava) に属している。しかし、ヴィシュヌ教といっても、最高神ヴィシュヌをナーラーヤナ神 (Nārāyaṇa) として奉じ、四種顕現説 (vyūhavāda) という独特の教理を有するパンチャラートラ派 (Pāñcarātrika) や、最高神ヴィシュヌをヴァースデーヴァ神 (Vāsudeva) として奉じ、その神の化身 (avatāra) ⁴を説くバーガヴァタ派 (Bhāgavata) に分かれる。先に挙げた五人のヴィシュヌ教に属するヴェーダーンタ学者のうち、ラーマヌジャはパンチャラートラ派系のシュリー・ヴァイシュナヴァ派 (Śrīvaiṣṇava) に属し、その他の四人はバーガヴァタ派に属しているとされる。

以上のように、主要なヴェーダーンタ学派のうち、アドヴァイタ学派以外は全てヴィシュヌ教系の学者によって創始されている。そしてその教学も、ヴィシュヌ教教学をヴェーダーンタ学派によって権威づけよう

としたものとなっている。更にもう一方で、シヴァ神を絶対的な最高神として奉ずるシヴァ教 (Śaiva) の或る学者達も、その教学の中にヴェーダーンタ学派の要素を採り入れ、その学派を成立させていった。中でも聖典シヴァ派 (Śaivasiddhānta) の学者であり、その教学がヴィシシュタ・シヴァ・アドヴァイタ説 (Viśiṣṭaśivādvaitavāda) と言われるシュリーカンタ (Śrīkaṇṭha, ca. 14th) は、BS に註釈を書く等、シヴァ教の教学とヴェーダーンタ学派の教学を融合させようとしている⁵。また英雄シヴァ派 (Vīraśaiva) の学者とされるシュリーパティ (Śrīpati, ca. 14th) も BS に註釈を残しており、その教学はヴィシェーシャ・アドヴァイタ学派 (Viśeṣādvaitavāda) と呼ばれる⁶。それ以外にも、12 世紀以降、ヴィシュヌ教、シヴァ教を問わず、有神論教派が勢力を増し、ヴェーダーンタ学派や、精神と物質との厳格な二元論を唱えたサーンキヤ学派 (Sāṃkhya) によってその教学の権威づけを行っていくようになる⁷。

また更に、以上のようなインドにおける有神論諸派の隆盛という現象と並行して、厳格な一神教であるイスラーム勢力がインドに王朝を樹立している。イスラーム王朝の誕生がインドにおける有神論勢力の隆盛に直接影響を及ぼしたかどうかは定かではないが、何某かの影響があったことは否定できないであろう。

このような時代背景のもと、聖典の聴聞、思惟、瞑想によって解脱することを目的とするアドヴァイタ学派にも、有神論諸派への対抗手段としてか、有神論化の動きが起こって来る。現在もアドヴァイタ学派の学統を受け継ぐヒンドゥー教教派にスマールタ派 (Smārta) があるが、このスマールタ派はヴィシュヌ教にもシヴァ教にも属さない第三の勢力である⁸。そして、アドヴァイタ学派の有神論化に貢献したのがマドゥスーダナである。特に、アドヴァイタ学派の教義の中に最高神への絶対的帰依、バクティ (信愛) の教えを意義づけたのはマドゥスーダナが最初であるとされる⁹。更に、バクティをアドヴァイタ教学に位置づけただけでなく、主宰神をアドヴァイタ教学上へ位置づけたことに関してもマドゥスーダナは大きな貢献をしたと筆者は考えている。しかし、この点を明らかにした研究は今までになされて来なかった¹⁰。この点が、筆者がマドゥスーダナの主宰神観の解明を研究課題としている所以である。

そして、マドゥスーダナの主宰神観を解明するためには、彼の宗教哲

学に関する著作の解読研究が必要である。彼の宗教哲学に関する著作には以下のものがある¹¹。

1. *Śivamahimnastotraṭīkā* (ŚMST)
2. *Bhaktirasāyana* (BhRA)
3. *Bhagavadgītāgūḍhārthadīpikā* (BhGGAD)
4. PP
5. *Halililāmṛtavyākhyā* (HLAV)

また、真偽不確定な著作として以下のものがある。

6. *Īśvarapratipatti prakāśa* (ĪPP)¹²
1. ŚMST は、プシュパダンタ (Puṣpadanta) というガンダルヴァ (gandharva) のシヴァ教の著作と伝えられる *Śivamahimnastotra* に対する註釈、2. BhRA はバクティを論じた著作、3. BhGGAD は BhG に対する広汎な註釈、5. HLAV は、ベンガルのヴィシュヌ教徒の修辞学者ヴォーパデーヴァ (Vopadeva or Bopadeva, ca. 12-13th) が著した BhP のインデックス的著作 *Halililāmṛta* に対する註釈、6. ĪPP は様々な学派の主宰神論やそれにまつわる議論を述べ、最終的にアドヴァイタ学派の主宰神観を開陳する書である。そして、本稿で扱う 4. PP は、冒頭で述べた通り、BhP 冒頭第一偈に対する註釈である。以上のように、マドゥスーダナの宗教哲学に関する著作は、シヴァ教系の著作 1. ŚMST 以外、ヴィシュヌ教系の著作である。マドゥスーダナはベンガル地方出身であり、チャイタニヤに始まる Gauḍīyavaiṣṇava (ベンガルのヴィシュヌ教) との思想的類似性が指摘されていたり¹³、更にはベンガルのヴィシュヌ教徒ヴォーパデーヴァの著作に註釈を書いていたりと、彼自身の有神論的立場としてはヴィシュヌ教徒であったことが窺われる¹⁴。またこの点は、マドゥスーダナの真作と考えられている著作では、マンガラ (帰敬頌) においてヴィシュヌ神に帰依していることから確かめられる。

以上のようなマドゥスーダナの宗教哲学の著作の中で、PP を研究する意義について以下に述べたい。アドヴァイタ学派の歴史において、BhP もその中に含まれる「プラーナ」(*Purāṇa*) 聖典に対する註釈を著した学匠は数が少なく、その著作が現存しているのはマドゥスーダナだけである¹⁵。シャンカラを始めとするほとんどのアドヴァイタ学派の学匠は、議論の根拠として伝承聖典 (smṛti) の扱いでプラーナ聖典を引

用することはあれども、註釈をほどこすことはなかった¹⁶。では、何故マドゥスーダナは BhP に註釈を書いたのであろうか。それは、彼がアドヴァイタ学派を有神論化する際に、彼の出身地であるベンガル地方で勢力を誇っていた Gauḍīyavaiṣṇava が BhP を中心とする一派であり、彼もその影響下にあったからである。BhRA や PP を見る限り、彼は BhP に精通しており、恐らく彼自身 BhP を自身の重要な聖典として奉じていたと考えられる。そのためマドゥスーダナは、BhP を諸ウパニシャッドや BhG, BS という「三種の道」と同等の聖典として位置づけようという意図を持って PP を著したと考えられる。同じバーガヴァタ派の聖典である BhG は既にシャンカラによって権威ある聖典として位置づけられていたが、マドゥスーダナは、シャンカラが BhG に対して行った操作を BhP に対して行おうとしたのである。その証拠に、後に改めて述べるが、マドゥスーダナは BhP が BS と一致することを PP において述べており、更にマドゥスーダナは、BhG を「汝はそれである」(tat tvam asi) というウパニシャッドの大文章 (mahāvākya) ¹⁷の趣意を述べるものであると考えているが¹⁸、BhP も「汝はそれである」ということを述べていると考えている。このように、ヴィシュヌ神を最高神とするバーガヴァタ派の聖典 BhP を、ヴェーダーンタ学派の「三種の道」と同等の聖典として解釈しようとする PP に見られるマドゥスーダナの思想を解明することは、彼のアドヴァイタ学派の有神論化の過程を明らかにする上で非常に重要な意義がある。しかしこのことは裏を返せば、ラーマヌジャ等が行ったようにヴィシュヌ神信仰をアドヴァイタ教学によって権威づける過程を明らかにすることでもあり、ヴィシュヌ教神学研究、更に大きく言えばヒンドゥー教有神論神学の上でも重要な意義を持っていると言えよう。

3. *Paramahaṃsapriyā* の刊本

現在筆者が入手できた PP の刊本は以下のものである。

PP_D *The Harilīlāmṛtam by Śrī Bopadeva with Commentary by Śrī*

Madhusūdana Sarasvatī and Śrī Bhāgavata (First Śloka) with The Paramahaṃsapriyā Commentary by The Same Commentator. Ed. Parajuli Pandit Devi Datta Upadhyaya (Chowkhamba Sanskrit Series no. 411). Benares: The Chowkhamba Sanskrit Series office 1933, pp. 58-73.

- PP_K *Śrīmadbhāgavatamahāpurāṇam Sātvatasamhitā: anekavyākhyāsamalaṅkṛtam. Prathamaskandhaḥ.* Ed. Śrī Śrīmad Kṛṣṇa Śāṅkara Śāstrī. Ahmedabad: Śrībhāgavatavidyāpīṭha 1965, pp. 55-60.
- PP_S *Śrīmadhusūdanasarasvatībhiḥ viracitā Paramahaṃsapriyā nāma Śrīmadbhāgavatādyapadyavyākhyā.* Ed. Svāmīnīlakaṇṭhānandagiri. Brahmācārī Gyānavaitanya for www.lalitaalaalita.com 2011.

尚, PP の写本に関していずれの刊本にも情報が載っていない。今後様々な写本のカatalogで PP 写本を探し、また入手する必要がある¹⁹。

PP_D は 16 ページ, PP_K は 5 ページ, PP_S は 23 ページと、刊本によって文章の組み方が違うためページ数に差があるものの、BhP の冒頭第一頌だけに対する註釈だけあって、PP は小作品であると言える。しかし、BhP 1.1.1 は 1pāda19 音節の Śārdūlavikrīḍita 体であり、1pāda8 音節の Śloka 体よりも音節数が多いとはいえ、そのたった 1 頌に対する註釈としては、PP は長編の著作とすることが出来よう。

また、この著作に対しては後代の学匠による註釈が著されておらず、更には現代インド諸語を含む現代語による翻訳も解読研究も未だなされておらず、筆者の研究がその先駆となる。上述の通り PP に対する註釈が著されておらず、またその文体も簡潔なため、解読が困難な箇所があり、その箇所に対してはマドゥスーダナの他の著作や彼に先行するアドヴァイタ学派の学匠の著作に見られる関連する議論と対比しながら解読を進めていく必要がある。しかしその場合でも、マドゥスーダナの著作はテキストデータ化されていないため、それぞれの著作に対する先行研究や翻訳研究を参考にしつつ²⁰、当該の議論を論じた箇所を探しながら読み進めなければならない。そのため、マドゥスーダナの思想研究を進める上で、彼の著作のテキストデータを作成することが課題として挙げられる。

4. *Paramahaṃsapriyā* の構造

以下では、PP 全体の構造に関して簡単に述べたい。記述の通り、PP は BhP 冒頭第一頌に対する註釈である。先ず、その BhP 1.1.1 を提示する。

janmādy asya yato 'nvayād itarataś cārtheṣv abhijñās svarāt tene brahma
hrdā ya ādikavaye muhyanti yat sūrayaḥ /
tejovārimṛdām yathā vinimayo yatra trisargo mṛṣā dhāmnā svena sadā
nirastakuhakaṃ satyaṃ paraṃ dhīmahi //BhP 1.1.1//

随伴と相違に基づいて、その者から (yatas) この [世界の] 生起等があり、その者は (yaḥ) 諸の対象に対する識者であり、自照者であり、最初の詩聖に心によってブラフマン (ヴェーダ) を顕示した [者であり]、その者において (yat) 賢者達が惑乱し、火、水、土の交替があるように、その者における (yatra) 三つの創出が偽りである、自身の威光によって常に欺瞞を離れている [その] 最高の真理を (satyaṃ param), [私達は] 静慮しよう (dhīmahi)。

この Śārdūlavikrīḍita 体の頌にマドゥスーダナは註釈を付しているのであるが、その註釈は、大きく分けると(1) アドヴァイタ学派の立場から (PP_D 58,14-69,9)²¹, (2) ヴィシュヌ教の一派サートヴァタ派 (Sātva-ta) の立場から (PP_D 69,10-71,3), (3) ヴィシュヌ教の一派バクティ派 (バクティのみに専心する者, kevalabhaktirasika) の立場から (PP_D 71,4 -73,26) という三つの立場から著されている。またこの三つの立場はそれぞれ、「ウパニシャッド論者」(Aupaniṣada, PP_D 69,9), 「プラーナ学者」(Paurāṇika, PP_D 71,3), 「修辞学者」(Ālankārika, PP_D 73,23) とも呼ばれている。

ところでこの三つの立場のうち、マドゥスーダナはいずれかの立場の註釈が勝れているといったことを述べず、それぞれの立場からの註釈に関して、ただ「ウパニシャッド論者に好まれる」(aupaniṣadāya rocate,

PP_D 69,9), 「プラーナ学者に好まれる」(paurāṇikāya rocate, PP_D 71,3), 「修辭学者に非常に好まれる」(ālaṅkārikāya rocatetarām, PP_D 73,23) と言うだけである。しかし、以上の三つの立場の中で、その註釈の分量からもうかがい知れるように、マドゥスーダナが最も勢力を注いだのがアドヴァイタ学派の立場からの註釈である。従って、マドゥスーダナが最も重要視していたのはアドヴァイタ学派の立場からの註釈であると考えられる。

また、この三つの立場の配列順序は、アドヴァイタ学派と比較的親近性の高いサートヴァタ派、そしてサートヴァタ派と同じくヴィシュヌ教に属しているバクティ派と、アドヴァイタ学派を筆頭に、その教学同士の親近性が高い順に配置したものであると考えられる。更に、三つの立場とは言うものの、サートヴァタ派の立場からの註釈もバクティ派の立場からの註釈もアドヴァイタ教学によって基礎づけられており²²、必ずしもサートヴァタ派本来の立場から、またバクティ派本来の立場から註釈されているものではない。そのアドヴァイタ教学化の度合いも、サートヴァタ派の方が強く、バクティ派の方が弱い感じを受ける²³。

また全体的な註釈のスタイルとしては、BhP 1.1.1 が「最高の真理を [私達は] 静慮しよう」という語句で終わっていることから、PP も BhP は最高の真理に対する静慮 (dhyāna*) を趣旨とするものとして解釈している (PP_D 58, 14-15)。そしてその「最高の真理」が、アドヴァイタ学派の立場からの註釈においてはブラフマンであり、サートヴァタ派の立場からの註釈においてはヴァースデーヴァ神であり、バクティ派の立場からの註釈においてはクリシュナ神である。そしてそれぞれの立場において、その「最高の真理」であるブラフマン、ヴァースデーヴァ神、クリシュナ神がどのような存在であるか、ということ述べているものとして BhP 1.1.1 を解釈している。この構造は BhP 1.1.1 と一致するものである。そして、ブラフマンやヴァースデーヴァ神やクリシュナ神を「静慮する」(dhīmaḥi) ということが、それぞれ瞑想 (nididhyāsana) と念想 (upāsana)、直接は述べられていないがバクティ (bhakti) と解釈されている²⁴。この点は、筆者の研究課題であるマドゥスーダナの主宰神観解明の指針となる。というのも、瞑想と念想とバクティの定義とその違いは何かということをも明らかにすることによって、

マドゥスーダナにとってヴァースデーヴァ神とクリシュナ神がどのような存在であり、どのような意義があるかということが明らかになると考えるからである。更に、ブラフマンに対する瞑想と比較することによって、ブラフマンと主宰神の関係性も明らかになり、アドヴァイタ学派の有神論化の意義も解明されると考える。

以上のように、PP は大きく分けて三つの立場から BhP 冒頭第一偈に対して註釈されたものであるが、アドヴァイタ学派の立場からの註釈箇所は、更に五つに分かれる。それは、①「それ」(tat)、即ちブラフマンを主題とする註釈 (PP_D 59,19-65,8)、②「汝」(tvam)、即ち命我 (jīvātman) を主題とする註釈 (PP_D 65,8-67,26)、③ BhP は BS と一致することを示す註釈 (PP_D 67,26-68,16)、④ BhP はガーヤトリー讃歌 (Gāyatrī, *Ṛgveda* 3.62.10) と一致することを示す註釈 (PP_D 68,16-24)、⑤ BhP 1.1.1 に BhP の 10 の特徴が収束するという註釈 (PP_D 68,24-69,9) の五つである。以下に、簡単に概略を述べる²⁵。

①「それ」を主題とする註釈²⁶

①の開始箇所等において、PP には以下のような記述がある。

PP_D 59,19-21: śuddhasya brahmaṇo nididhyāsyamānasya paramārthasatyatām upapādayitum tatpadārthasvarūpatām āha – **janmādy asya yata** ityādinā.

清浄で、瞑想されるブラフマンが勝義の真理であることを説明するために、「それ」(tat) という語の意味内容の本質を述べる。その者から、この〔世界の〕生起等が、等ということによって。

PP_D 63,12-14: evaṃ pūrvārdhena tatpadavācyārtham uktvā, aparārdhena tallakṣyaṃ vaktum ārabhamāṇo "adhyāropāpavādābhyāṃ niṣprapañcam prapañcyate" iti nyāyenāha – **tejovārītyādinā**.

以上のように、前半部によって「それ」という語によって述べられる意味内容を述べて、後半部によって、それ(「それ」という語)によって間接表示されるものの言及を開始するために、「仮託と損減によって、虚構を欠いたものが語られる」という論理によって述べる。火、水等によって。

PP_D 64,25f.: tathā ca māyātakāryahīnaḥ paramātmā tatpadalakṣyo darśitaḥ. そして以上のように、マーヤーとその結果を欠いている最高のアートマンが、「それ」という語によって間接表示されることが示された。

これらの記述から分かるように、この①では、「汝はそれである」(tat tvam asi) という大文章の「それ」(tat) を主題として註釈を付していることが理解されよう。そして、その「それ」とは伝統的にブラフマンを指すものであり、それを裏付けるように最高のアートマン(ブラフマン)が「それ」で示されていることが述べられている。そしてこの①では、ブラフマンが世界の原因(pradhāna, kāraṇa)であること、そのブラフマンが精神的存在であること、また一切知者であり、聖典の原因であることに関する議論がなされ、更に聖典がブラフマンに対する認識手段であることや仮現説(vivartavāda)、無明(avidyā)に関する議論がなされる。

②「汝」を主題とする註釈

続いて②であるが、PP に以下のような記述がある。

PP_D 65,9f.: atha ca tvampadārtho 'pi śakyate 'nena ślokena darśayitum.
ところで(atha ca)、「汝」という語の意味内容も、この頌によって示すことが出来る。

PP_D 67,12-14: evaṃ tvampadavācyārtham pūrvārdhena pratipādyā, tallakṣyam uttārārdhena vaktum adhyāropāpavādanyāyenārabhate – **tejovāri-mṛdām yathā vinimaya ityādīnā.**

以上のように、「汝」という語によって述べられる意味内容を、前半部によって解説してから、それによって間接表示されるものを、後半部によって、仮託と損減という論理によって述べることを開始する。火、水、土の交替があるように、等ということによって。

ここでは①とは異なり、「汝はそれである」という大文章の「汝」(tvam)

m) を主題として註釈が付されていることが分かる。そして、②における用語を見ると、この「汝」は命我を指している。この②では、命我に関して、身体の生起等が虚偽であること、輪廻が解脱の原因であること、自己顕照の証明、命我が唯一であることの証明等という議論が展開されている。

①と②では、アドヴァイタ学派の論題の主要なものが論じられており、PP が一種の綱要書的な体裁を持っていることが理解される。

③ BhP は BS と一致することを示す註釈

この③では、BhP 1.1.1ab が BS 第一篇と一致すること、BhP 1.1.1c が BS 第二篇と一致すること、BhP 1.1.1d の「[私たちは] 静慮しよう」(dhīmahī) が BS 第三篇と一致すること、BhP 1.1.1d の残りの箇所が BS 第四篇と一致することが説かれている。

④ BhP はガーヤत्री讃歌と一致することを示す註釈

④では、ガーヤत्री讃歌が BhP 1.1.1 と対応していることが説明されている。

⑤ BhP 1.1.1 に BhP の 10 の特徴が収束するという註釈

⑤では、BhP 2.10.1-9 に説かれている BhP の 10 の特徴である創出 (sarga)、二次創出 (visarga)、存続 (sthāna)、育成 (poṣaṇa)、加護 (ūti)、マヌの時代 (manvantara)、支配者 (王) の物語 (īśānukathā)、崩壊 (nirodha)、解脱 (mukti)、拠所 (āśraya) が BhP 1.1.1 に説かれていることが述べられている。PP においてこの 10 の特徴は、BhP 全十二巻のうち BhP の第三巻から第十二巻までにそれぞれ説かれているとされ、また BhP 第一巻で説かれている有資格者 (adhikārin)、第二巻で説かれている達成手段の確定 (sādhanaṅuṣṭhāna) も BhP 1.1.1 で説かれていると解釈するため、結局マドゥスーダナは BhP 1.1.1 が BhP 全巻の精髓であると解釈しているということになる。

以上がアドヴァイタ学派の立場からの註釈箇所の簡単な概要である。また、サートヴァタ派の立場からの註釈は、パンチャラートラ派の独特の教義である主宰神の四種顕現説のアドヴァイタ教学による再解釈という方法で付されている²⁷。更にバクティ派の立場からの註釈は、主に BhP 10.13 に見られるクリシュナ神とブラフマー神の物語と BhP 1.1.1 を関係づけながら、クリシュナ神の様態を解説するという形で付された

註釈である。

5. PPに見られる認識手段 (pramāṇa) としての論書

PP はアドヴァイタ学者であるマドゥスーダナの著作であるので、基本的に議論の認識手段として聖典や論書が示される。以下では簡単に、アドヴァイタ学派の立場からの解釈、サートヴァタ派の立場からの解釈、バクティ派の立場からの解釈における認識手段として引用される聖典や論書の種類の大まかな傾向に関して述べたい。

まず、アドヴァイタ学派の立場からの解釈においては、やはり圧倒的に *Bṛhadāraṇyaka* や *Chāndogya* 等といった古ウパニシャッドが認識手段として引用されている。加えて、BhP の文句に対して独特な解釈を下す場合がわずかではあるが存在し、その際には、サンスクリット語として可能な解釈であることを示すために、パーニニ (Pāṇini, ca. B.C. 5th) やパタンジャリ (Patañjali, ca. B.C. 2nd-A.D. 2nd) と言った文法学派の典籍を認識手段として引用している。また勿論、③ BhP は BS と一致することを示す註釈、④ BhP はガーヤत्री讃歌と一致することを示す註釈においては、BS やガーヤत्री讃歌を典拠として引用している。以上のように、アドヴァイタ学派の立場からの解釈においては、主にシャンカラ以来認識手段として使用されている古ウパニシャッドを中心とした天啓聖典 (śruti) と BS 等の伝承聖典 (smṛti) が認識手段として示されている。

続いてサートヴァタ派の立場からの解釈においては、議論において認識手段が示されるケースは多くはない。しかし、四種顕現説に対する解釈の認識手段として、*Nṛsiṃhottaratāpanīya* (NUTUp) というヴィシュヌ教系の新ウパニシャッドが引用されている。更に、四種顕現説の詳細の参照文献として、*Mahābhārata* の *Nārāyaṇīya* 節が提示されている。また、パンチャラートラ派の四種顕現説を批判する際に BS が引用されている。以上のような聖典や論書の提示に関して特徴的なのは、NUTUp というヴィシュヌ教系の新ウパニシャッドを引用することであろう。し

かし、新ウパニシャッドとはいえ、あくまでウパニシャッドを使用する点にアドヴァイタ学者マドゥスーダナの解釈の特徴が表れているように思える。

しかし、バクティ派の立場からの解釈においては、BhP や BhG というパーガヴァタ派の聖典、修辞学者マンマタ (Maṃmata, ca. 11th) や文法学者パーニニの典籍が引用されている。そのため、この立場からの解釈は、先の二つの立場からの解釈とは少し距離があるように思われる。

6. 終わりに

以上、非常に簡単で雑多ではあるが、PP の成立背景やその特徴・構造、刊本等について紹介してきた。筆者は既に幾つかマドゥスーダナの主宰神観に関する研究論文を発表している²⁸。今後も PP の精確な翻訳を作成すると同時に更なる研究成果を公表していくつもりである。また、PP に対する詳細な日本語の訳註研究と英語の訳註研究を行っていく予定である。その作業が終了する暁には、改めて PP に関する詳細な概説を作成し、公表したい。

付録

以下に PP_s に掲載されているシノプシスを提示する。再考すべき点も多いが、解読上便利でもあるので参考のために掲載する。

- ・基本 [文献] たるパーガヴァタ [・ブラーナ] mūlaṃ bhāgavatam
- ・帰敬頌 maṅgalam
- ・文章の制作の目的の説明 grantharacanāprayojanakathanam
- ・基本 [文献] が文章の趣意である瞑想を本性とする帰敬頌であること granthatātparyadhyānātmakamaṅgalatvaṃ mūlasya
- ・ブラフマンの本質の定義の説明 brahmasvarūpalakṣaṇakathanam
- ・ブラフマンは、世界である迷乱の基盤であることによって質料因

- であり、また、それ（世界の迷乱）の拒斥の極限であることの故に、勝義的なものである brahmaṇo jagadbhramādhīṣṭhānatvenopādānatvaṃ tadbādhāvadhītvāt pāramārthikatvaṃ ca
- 清浄なものは瞑想の対境である śuddhasya nididhyāsanaviṣayatvaṃ
 - 瞑想の定義 nididhyāsanalakṣaṇam
 - 念想の定義 upāstilakṣaṇam
 - 清浄なものは念想の対境ではない śuddhasyopāstyaviṣayatvaṃ
 - 清浄なものは瞑想の対境である śuddhasya nididhyāsanaviṣayatvaṃ
 - 瞑想は吉祥である nididhyāsanasya maṅgalatvaṃ
 - [ブラフマンが] 清浄であることを説明するために、ブラフマンの精神という特徴を解説すること śuddhatopapādānāya brahmaṇas taṭasthalakṣaṇakathanam
 - ブラフマンが世界の質料因であることに対する諸認識手段 brahmaṇo jagadupādānatve pramāṇāni
 - 空が世界の質料因であることの否定 śūnyasya jagadupādānatvanirāsaḥ
 - 結果は消滅するものであっても、その質料因は常住である kāryasya vināśīte 'pi tadupādānasya nityatvaṃ
 - 心が世界の原因である cetanasya jagatkāraṇatvaṃ
 - 世界の原因は一切知者である jagatkāraṇasya sarvajñatvaṃ
 - 心で無いものが世界の原因であることの否定 acetanasya jagatkāraṇatānirāsaḥ
 - ブラフマンが契機因と質料因である時、唯一の識によって全ての識が生起する brahmaṇo nimittopādānatve ekavijñānena sarvavijñānopapattih
 - ブラフマンは聖典の母胎である brahmaṇaḥ śāstrayonitvaṃ
 - ヴェーダは非人為的なものである vedasyāpauruṣeyatvaṃ
 - ブラフマンがヴェーダの質料因であることに対する推論 brahmaṇo vedopādānatve 'numānam
 - ヒラニヤガルバはヴェーダの作者ではなく、世界の質料因でもない hiranyagarbhasya vedāpravaktṛtvaṃ jagadanupādānatvaṃ ca
 - 思考器官のみによってヴェーダの意味内容を把握する者であるの

- で、ブラフマンは内制者である manasaiva vedārthagrāhīṭṭvena brahmanāḥ sarvāntaryāmitvam
- 論理家等にある、ヴェーダーンタが妥当であることに対する迷妄 tārīkikādīnām vedāntaprāmāṇye mohah
 - 迷妄は二種である mohasya dvaividhyam
 - 覆障も二種である āvaraṇasyāpi dvaividhyam
 - [天啓聖典が] 非顕現という覆障を消失させるために、直証の証明手段であることの確立 abhānāvāraṇanivāraṇāya sāksātkārasādhanānuṣṭhānam
 - 投影と覆障 vikṣepāvāraṇam
 - ヴェーダーンタは妥当である vedāntānām prāmāṇyam
 - 現象世界は虚偽である prapañcamithyātvam
 - 新造説と転変説の否定 ārambhapariṇāmavādayor nirākaraṇam
 - 生起以前に結果は有であるか非有であるかという考察 utpatteh prāk kāryasya sattvāsattvavicārah
 - 因中無果論の否定 asatkāryavādanirāsaḥ
 - 因中有果論の否定 satkāryavādanirāsaḥ
 - 残余法に基づく、言説不可能性としての仮現説 anirvacanīyatvena pariśeṣād vivartavādaḥ
 - 無明が真実なものであることに対する前主張 avidyāyāḥ satyatve pūrvapakṣaḥ
 - 定説において無明は構想されたものであること avidyāyāḥ kalpita-tvam siddhānte
 - 勝義の真実であることが、常住であることの適合要因である paramārthasatyatvam nityatvasya prayojakam
 - 「それ」と「汝」という語にとっての特徴づけられるものの提示 tattvam padayor lakṣyapradarśanam
 - 基本 [文献] の語句によって示される意味内容 mūlapadasūcītarthāḥ
 - また、命我を目的とする解説 [が始まる] atha jīvaparavyākhyānam
 - 命我における生起等の随伴が自律的であることの否定 jīve ja-

nmādyanvayasya svatastvanirākaraṇam

- 「拡散して現れる」[と説く] 天啓聖典の証明 vyuccarantiśruter upapādanam
- 唯物論者の見解の否定 cārvākamatānirāsaḥ
- アートマンはみずから輝くものである ātmanaḥ svaprakāśatvam
- 聖典の開始は無意味ではない śāstrārambhāsyāvaiyarthyaṃ
- 輪廻は解脱の原因である saṃsārasya mokṣaḥetūā
- ブラフマンは身体毎に区別されておらず、また歓喜をあり方としている pratidehaṃ brahmaṇo 'bhinnatvam ānandarūpatvaṃ ca
- アートマンが唯一であることの確定 ātmaikatvanirūpaṇam
- 限定的条件との混淆は虚偽に他ならない upādhisamsargā mithyaiva
- 聖典の対境は常に惑乱を離れている sadānirastakuhakaḥ śāstraviṣayaḥ
- 瞑想が教えられていること nididhyāsasasya pratipādyatvam
- 聖バーガヴァタはシャーリーラカ・ミーマーンサーをあり方としている śārīrakamīmāṃsārūpatvaṃ śrīmadbhāgavatasya
- [聖バーガヴァタは] パーラマハンサ・サンヒターであることが可能 pāramahaṃsasamhitātvopapattiḥ
- この聖典がガーヤトリーをあり方とすること gāyatrīrūpatvam asya śāstrasya
- バーガヴァタ [・プラーナ] の特徴 bhāgavatalakṣaṇam
- 創出等という 10 の特徴の提示 sargādidaśalakṣaṇasūcanam
- サートヴァタ派の見解による解説 sātvatamatena vyākhyānam
- パンチャラートラ派の [教義] 形式の否定 pāñcarātrikaprakriyānirāsaḥ
- ヴァースデーヴァが念想されるべきこと vāsudevasya upāsyatvam
- ヴィラージュと自照者との定義の区別 virāṭsvarājōḥ lakṣaṇabhedau
- ヒラニヤガルバの特徴 hiraṇyagarbhāsya lakṣaṇam
- サンカルシャナの特徴 saṃkarṣaṇalakṣaṇam
- ヴァースデーヴァの本質 vāsudevasvarūpam
- バクティの見解に従っての解説 bhaktimatānusāreṇa vyākhyānam
- 聖クリシュナは、一切の愛情の依処であるので、静慮されるべき

- である śrīkṛṣṇasya sarvapremāspadatvena dhyeyatvam
- 接触と分離からの愛の感情の生起 samnikarṣaviprakarṣābhyāmratiḥbhāvotpattiḥ
 - 主宰神は全知全能であるので、彼に対する愛情は無意味ではない īśvarasya sarvajñasarvaśaktitvena tasmin premā na nirarthakaḥ
 - ブラフマーへの、真理の知等という生得のものの提示 viriñcaye satyajñānādinijarūpapradarśanam
 - 主の幻力は一切を惑わせるものであること bhagavanmāyāyāḥ sarvamohakatvam
 - ブラフマーによって仔牛と牛飼いが運び去られても、主によって再びそれらの創出があること brahmaṇā vatsagopālādyapaharaṇe bhagavatā punaḥ teṣāṃ sarjanam
 - ブラフマーの満足のために、彼によって運び去られた者達は連れ戻されぬ brahmaṇaḥ samtoṣāya tadapahr̥tānām anāyanam
 - 主宰神はアートマンをあり方としているので、ブラフマーの罪過に耐えること īśvarasyātmarūpatvena brahmāparādhasaḥiṣṇutvam
 - 聖クリシュナは信愛の情緒の拠所として、文章で理解されるべきものである śrīkṛṣṇasya bhaktirasāvalambanatvena granthapratipādyatvam

参考資料

Chaudhuri, Roma

[2012] *Ten Schools of The Vedānta [Part I, II & III]*. Kolkata: Rabindra Bharati University 2012.

Gupta, Sanjukta

[2006] *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The Philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*. London and New York: Routledge 2006.

Hara, Minoru (原実)

[1982] 「II 中世 第三章 2 シヴァ教諸派の宗教思想」早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学著『インド思想史』東京大学出版会, pp.

161-168, 1982.

Hino, Shoun (日野紹運)

[1985a] 「ヒンドウの宗教世界—不二一元論派学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティーのバクティ観をめぐって」 *Sambhāṣā* 6, 名古屋大学印度学仏教学研究会.

[1985b] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティー—考」『印度学仏教学研究』33-2, 日本印度学仏教学会.

[1988] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーにおけるブラフマンの意義について」『成田山仏教研究所紀要』11, 仏教思想史研究 II, 成田山新勝寺.

Manabe, Tomohiro (眞鍋智裕)

[2014] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの vyūha 説撰取の方法——シャンカラの所説との対比から」『久遠—研究論文集』5, 早稲田大学仏教青年会.

[2015] 「*Īśvarapratipattiprakāśa* における諸主宰神論の統合方法の解明」 *Waseda Rilas Journal* 3, 早稲田大学総合人文科学研究センター.

[forthcoming] "Madhusūdana Sarasvatī's Criticism of the Hiranyagarbha School: On the Liberation Theory," *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* LXIX. Tokyo: Japanese Association of Indian and Buddhist Studies (Nihon-Indogaku-Bukkyōgaku-Kai).

Mayeda, Sengaku (前田専学)

[1980] 『ヴェーダーンタの哲学——シャンカラを中心として——〈サーラ叢書〉24』平楽寺書店, 1980.

[1982a] 「十六世紀における不二一元論の変容—— Madhusūdana Sarasvatī を中心として」田村芳朗還暦記念会編『田村芳朗博士還暦記念論集：仏教教理の研究』春秋社, 1982.

[1982b] 「II 中世 第四章 イスラーム教の浸透と思想の変容」早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学著『インド思想史』東京大学出版会, pp. 187-215, 1982.

Nakamura, Hajime (中村元)

[1950] 『初期のヴェーダーンタ哲学〔インド哲学思想第一巻〕』岩波書店, 1950.

[1951] 『ブラフマ・スートラの哲学〔インド哲学思想第二巻〕』 岩波書店, 1951.

[1955] 『ヴェーダーンタ哲学の発展〔インド哲学思想第三巻〕』 岩波書店, 1955.

[1956] 『ことばの形而上学〔インド哲学思想第四巻〕』 岩波書店, 1956.

[1989] 『シャンカラの思想〔インド哲学思想第五巻〕』 岩波書店, 1989.

Nelson, Lance E

[1988] "MADHUSUDANA SARASVATI ON THE "HIDDEN MEANING" OF THE BHAGABADGĪTĀ: BHAKTI FOR THE ADVAITA RENUNCIATE," *Journal of South Asian Literature* 23-2, Michigan: Asian Studies Center, Michigan State University.

[1989] "*Bhakti Rasa* for the Advaitin Renunciate: Madhusudana Sarasvati's Theory of Devotional Sentiment," *Religious Traditions* 12, Cambridge: Cambridge University Press.

[2004] "The Ontology of Bhakti: Devotion as Paramapurūsārtha in Gaudīya Vaisnavism and Madhusūdana Sarasvatī," *Journal of Indian Philosophy* 32, Netherlands: Kluwer Academic Publishers.

[2007] "Theological Politics and Paradoxical Spirituality in the Life of Madhusudana Sarasvatī," *Journal of Vaishava Studies* 15-2, Virginia: Deepak Heritage Books.

Patankar, R. B.

[1987] "MADHUSŪDANA SARASVATĪ'S ŚRĪ BHAGAVAD BHAKTIRASĀYANA," *India's Intellectual Traditions*, ed. Daya Krishna, Delhi: Motilal Banarsidass.

Pellegrini, Gianni

[2014] "'Old is Gold!' Madhusūdana Sarasvatī's Way of Referring to Earlier Textual Tradition," *Journal of Indian Philosophy* 43, Published online: Springer Science+Business Media Dordrecht 2014.

Sheridan, Daniel P.

[1986] *The Advaitic Theism of The Bhāgavata Purāṇa*. Varanasi: Motilal Banarsidass 1986.

Shima, Iwao & Hikita, Hiromichi (島岩, 引田弘道)

[1988] 「『バガヴァッド・ギーター註解』和訳（序章）」『人間文化』3, 愛知学院大学人間文化研究所, 1988.

¹ 以下の概説にあたっては、中村[1950], [1951], [1955], [1956], [1989], 前田[1980], [1982b]等を参照した。

² しかし、文献として遺っていないからといって、この頃ヴェーダーンタ学派の学者たちが存在しなかったわけでは決してない。シャンカラのBSBhには、彼以前の多くのヴェーダーンタ学者が言及されている。中村[1950], [1951], [1955], [1956]参照。

³ なお、現在直接的な学派が残ってはいないが、重要なヴェーダーンタ論者に、不一不異論 (Bhedābhedavāda) を説いたバースカラ (Bhāskara, ca. 9th) が存在する。

⁴ この化身の中でも最も重要な神がクリシュナ神 (Kṛṣṇa) である。

⁵ Chaudhuri[2012] pp. 325-396, 原[1982] pp. 162-163 参照。また、シヴァ教系のアドヴァイタ学派の学者アッパヤ・ディークシタ (Appaya Dīkṣita, ca. 1550) は、シュリーカンタのBS註解に複註を著している。

⁶ Chaudhuri[2012] pp. 397-438, 原[1982] pp. 166-167 参照。

⁷ 他にも、重要なシヴァ教の学派としてトリカ派 (Trika), 獣主派 (Pāśupa-ta), 水銀派 (Raseśvara) が挙げられる。原[1982] pp. 161-168 参照。

⁸ しかし、その名前がシヴァ神の異名であるため、アドヴァイタ学派の開祖シャンカラはシヴァ神の化身とされている。

⁹ 前田[1982a] p. 472 参照。

¹⁰ 今までになされて来たマドゥスーダナの宗教哲学に関する研究は、ほとんどがバクティに関するものである。それには以下のようなものがある。Patankar[1987], 日野[1985a], [1985b], Nelson[1988], [1989], [2004], [2007], Gupta[2006]。しかし、日野[1988]は、ブラフマンとクリシュナ神の関係にまで説き及んでいる。

¹¹ Gupta[2006] p. 11 参照。このリストは、相互の引用関係等から Gupta 女史によって著作順に並べられたものである。

¹² Gupta[2006] p. 10, Pellegini[2014] p. 286, fn. 28 では、文章スタイル、また

他のマドゥスーダナの著作への言及がないことから、ĪPP の真偽は決定出来ないとされている。しかし筆者は、ĪPP の文章スタイルがマドゥスーダナの他の著作と大きく異なっているとも思われず、また PP やマドゥスーダナの *Siddhāntabindu* (SB) にパラレルな議論が多く見られることから、ĪPP はマドゥスーダナの真作と見做していいのではないかと考えている。しかし、真作であると断定できるような証拠は未だ見つけていない。

¹³ Gupta[2006] pp. 119-144 参照。

¹⁴ ŚMST も、シヴァ教の著作に対する註釈書であるが、全編を通じて「ハリ [神] (ヴィシュヌ神) の立場でも同様である」(haripakṣe 'py evam) という記述が見られ、有神論的立場からすると中立的立場から著された著作であると考えられる。

¹⁵ Sheridan[1986] p. 118 によれば、チツツカ (Citsukha, ca. 13th) とプニヤーラニヤ (Punyāranya, ??) が BhP に対する註釈を著したというが、現存していない。

¹⁶ 更に言えば、プラーナ聖典の直接の源泉となった『マハーバーラタ』 (*Mahābhārata*, MBh) に対して註釈を付したアドヴァイタ学匠もいない。それはひとえに、MBh の神髄は BhG に結集していると考えていたためであろう。因みに、BhP の成立は 10 世紀頃とされ、シャンカラが活動していた時代にはまだ成立していなかった。

¹⁷ この文章は、*Chāndogyaopaniṣad* 6.7.8 以下に幾度も現れるものであり、*Bṛhadāraṇyakopaniṣad* の「私はブラフマンである」(ahaṃ brahmāsmi) と共に、ウパニシャッドの二大文章と呼ばれ、重要視されている。

¹⁸ BhGGAD 3,30-32: tatra tu prathame kāṇḍe karmatattvāgavartmanā / tvampadārtho viśuddhātmā sopapattir nirūpyate //8// dviṭīye bhagavadbhaktiniṣṭhāvarṇanavartmanā / bhagavān paramānandas tatpadārtho 'vadhāryate //9// tṛtīye tu tayor aikyaṃ vākyaṃ varṇyate sphuṭam / evam apy atra kāṇḍānām sambandho 'sti parasparam //10// (一方、このうち第一の部門においては、行為とその結果の放棄によって、「汝」という語の対象が清浄なアートマンであると実証的に決定される。第二 [の部門] においては、主に対する信愛の専念を教示することによって、「それ」という語の対象が最高の歓喜である主であると確定される。一方第三 [の部門] においては、文章の意味内容は、それら [「それ」と「汝」と言う語の対象] が同一であることであると明白に述べられる。また以上のように、ここ [BhG] では [三] 部門が相互に関連しあつて

いる)。島・引田[1988]参照。

¹⁹ もしも PP の写本情報を持っている方がいらっしゃれば、ご教示いただければ幸いです。

²⁰ マドゥスーナの宗教哲学に関する著作に関して、2. BhRA に関しては Nelson の一連の研究と第一章の英訳、またヒンディー語註があり、3. BhG-GAD に関しては英訳が存在する。その他の彼のアドヴァイタ教学に関する著作には以下のものがある。1. *Samkṣepaśārīrakasārasaṃgraha* (SŠSS), 2. *Vedāntakalpalatikā* (VKL), 3. *Siddhāntabindu* (SB), 4. *Advaitasiddhi* (AS), 5. *Advaitaratnaraṣaṇa* (ARR) がある。その中で、2. VKL, 3. SB, 4. AS には英訳と先行研究が、5. ARR にはヒンディー語訳が存在する。

²¹ このアドヴァイタ学派の立場からの註釈の前に、Śloka 体による帰敬頌 (maṅgala) と Mālinī 体の PP 制作の目的を説明した頌が 1 頌ずつある。

²² サートヴァタ派の立場のアドヴァイタ教学化に関しては、拙稿[2014], [2015]を参照。

²³ このように述べたが、バクティ派の立場に関しては、ほとんどアドヴァイタ教学化されていない可能性もある。この点に関しては、マドゥスーナのバクティ論書である BhRA と併せて PP を精確に解説し、彼が影響を受けたと考えられるヴォーパデーヴァの著作との比較研究を行う必要がある。

²⁴ この点に関しては、BhRA におけるバクティの定義と比較し、検討する必要がある。

²⁵ PP_s には PP 全体の細かなシノプシスが付してあるが、その題や分け方に関して再考の余地があるものとする。新たにシノプシスを付すことは今の筆者の力量を超えるものであるが、今後 PP を精読し、新たにシノプシスを作成したい。しかし、PP_s のシノプシスが非常に有益なものであることは間違いないので、本稿末に付録として掲載している。

²⁶ ①以前にも、BhP が瞑想 (dhyāna) を趣意としていること、BhP 1.1.1 の「最高の真理」(param satyam) がブラフマンを意図していること、瞑想と念想 (upāsana) の定義が述べられている。最後の瞑想と念想の定義と相互の相違は PP 解説において重要な点であり、筆者はこの点に関する学術発表と学術論文を準備中である。

²⁷ 眞鍋[2014] 参照。

²⁸ 眞鍋[2014], [2015], [forthcoming].